

卷 頭 言

昭和 33 年 を 迎 え て

会 長 角 野 尚 徳



あらたまの年を迎えるにあたり、まず会員諸賢の御健闘と御多幸をお祈りすると共に本会並びにわが国鉄鋼技術発展のために、旧年にも増して研さんに励まれんことを願います。

昭和 32 年は世界経済拡大傾向のうちにあつて、すべての人が 2 年来の高原景気の持続を期待し、われわれ鉄鋼業界においても、輝やかなしい飛躍の年として明るい希望をもつて新年を迎えたのであつた。ところがやゝ急

速にすぎた日本経済の拡大は年半ばにして外貨収支の危機が伝えられ、一転して経済抑制政策がとられることとなつた。鉄鋼業の第 2 次合理化計画推進も、かかる情勢のもとで種々困難な事態に当面するに至つたわけであるが、鉄鋼業は本年も引続き、この様な不況に対処して行かなければならないだろう。

しかしここで、われわれはいたずらに目先の経済問題にのみ目を奪われることなく、遠く将来を慮つて、来るべき発展の時に備えることを忘れてはならない。今後国際収支を改善し、日本経済の安定と拡大をもたらすためには、基礎的生産財たる鉄鋼の増産と価格の低下をはかり、一般商品の国際的競争力を高めることが必要である。そのためには設備の合理化は焦眉の急務であり、何としても推し進めなければならない課題であつて、それに伴う技術の進歩発達に希望されているのである。従つてかかる時こそ、われわれ技術者は一段と努力しなければならないのであつて、じつくり腰を落着けて研究に励み、基本的、本質的問題の探究から製品品質の改善、コストの低減、さらには新しい時代の要求に応える新品种の製造にむかつてたゆまぬ努力を続けて行かなければならない。

戦後すでに 12 年余を経過して、今や日本鉄鋼業は技術的にも経済的にも、海外の主要製鉄国と比肩しうるまでに発展して来た。そしてその過程を顧みると、幾多の困難を克服しながら、よくぞ短時日のうちにここまで到達しえたものと感慨深いものがある。しかしここに一つ考えるべき問題は、これまでの努力の大半は欧米の進歩した技術を導入し、それを消化吸収して、高い水準に引き上げることに費やされており、遺憾ながら今日の鉄鋼業の発展も、日本の独力のみでなしとげられたものではないことである。このことは彼我の間に技術の懸隔が厳然として存在し一方戦後の荒廃から急速に拡大して行く鉄鋼需要にテンポを合せて行くためには、どうしても踏まざるをえなかつた過程であり、また最も効果的な方法であつたことは認めざるを得ない。しかし今後は今までのごとく、外国の既成技術の移殖にのみ汲々としていては、いつまでもわが国の技術は、先進国の後塵を拝するばかりで、いたずらに後進国の汚名を冠せられることに甘んじなければならぬまい、ましてや一步抜きんでることなどは望むべくもない。勿論今後もすぐれた点は大いに学びとらなければならないが、もうそれだけに止つては許されない。学ぶ事に並行して大いに独創力を発揮して、日本独自の技術を生長させなければならない。そのためにはわれわれ技術者各自の自覚と努力が必要であることは言を俟たない。さらに、このような技術の発芽、成長を助長するような組織なり環境が整備されることは、一層大切なことと思われる。

世界はまさに日進月歩である。特に第三の火である原子力の利用は、技術と経済に大きな影響を与えるであろう。わが国も試験研究に着手して以来 5 年目を迎え、これからは実用化の面においても、急速な発展が期待される。言うまでもなく原子力産業は高度の総合技術であり、関連産業のすべてが急速に進歩して、初めて健全な発展が実現しうるものである。その中でも鉄鋼は原子力開発利用の進展につれてますます需要が拡大し、かつ品質的にも高度の要求がなされるものと予想されるのであつて、わが国原子力産業発展のために、われわれ鉄鋼人に課せられた役割は重大である。この点について深く認識し、来るべき原子力時代の鉄鋼需要に対して積極的に研究を重ね、新時代の進展に備えられんことを切に望むものである。

以上、新年を迎え、いささか所感を述べ年頭の御挨拶にかえる。